

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：宮川麻理子

1950年代終わり頃に土方巽を中心に始められ、その20年後、海外に出はじめてから国際的な発展をとげた「舞踏」は20世紀後半の代表的な舞踊様式の一つである。宮川麻理子氏の博士論文『大野一雄論——身体とエクリチュール』は、この舞踏のパイオニアの一人であり、舞踏の国際化に大きく貢献した大野一雄の仕事の解明を目指したものである。宮川氏が特に問題にしたのは、大野の舞踏作品の生成過程とその美学である。方法論としては、大野が初期から執筆したテキストや作品の映像資料のみならず、今までほぼ未公開で、かつ研究されたことのない大野一雄の残した「創作ノート」の分析に重点を置いた。

約5千枚という膨大なコーパスをなすこの「創作ノート」は、大野が言葉や文章、デッサンを描き、稽古やリハーサルで参照したメモの総称を指すが、その存在自体は書く行為が舞踏創作に欠かせないプロセスの重要性を物語っていると同時に、場合によっては解読不可能に近い生の素材でもあるそのノートを研究対象にしたことは本論文の大きな挑戦であり、主な意義の一つとも言える。この創作ノートが大野のキャリアにおいて方法として実際に現れるのは大野の名作《ラ・アルヘンチーナ頌》以降であることを鑑みて、それまでの40数年間に形成された踊る身体、蓄積された技法などを創作ノート時代の仕事の重要な背景として、先に論じる必要があることは序論で述べられた。

本論文は、序論以外に三部と結論から構成されており、第1部は第1章から第2章、第2部は第3章から第5章、第3部は第6章から第7章から成り、本文はA4判246ページ、それに102点の図版及び図版出典一覧と参考文献・URL一覧あわせて72ページが付されている。

第1部「大野一雄の体の使い方——身体の技法」では、大野が体験した過去の身体文化がいかに彼の身体を形成し、どのようにその影響が見られたかが論じられる。H・クロイツベルクの舞台観劇及び江口隆哉・宮操子のもとで習得した表現主義舞踊との接点を通じて、フィギュールの類似のみならず、H・ゴダールの身ぶりの「地」の理論に基づき、形に還元できない動きの質を決定する重力の処理、身体の末端への集中などの技法は、土方と舞踏を探求し始め、ダンステクニックを否定したあとでも、大野の身体に現れ続けると指摘した。又、同じ表現主義舞踊のM・ヴィグマンが語った「見えないパートナー」に極めて近いものが、大野の晩年の作品まで現れることが認められるが、その技法はこの時期に準備されたことを確認した。続いて、ダンス以外の身体文化が大野の動きに継承されたのは、体操とパントマイムであることが示された。さらに、女学校の体操教師であった大野が1955年に複数の新興体操に触れながらマスゲームを指導した際の資料から、視線や姿勢、集団に埋没しない個人への言及の重要性を指摘した。また、J=L・バローの演劇論などを参照する1960年以降に書かれたテキストから、直立姿勢を支える根幹とそこから繰り出される表現性、意識的な心身のつながりなどに、パントマイムとは別にソマティクスに近い身体観を持っていたとし、それらは90年代の稽古映像に見られる運動の分析、また川口隆夫が大野の身体を詳細な部分までなぞった最近のパフォーマンスも参照しつつ後年の大野の身体観に共通すると論じている。

第2部「創作ノートによる振付の担保——大野一雄における『作品』概念の検討」では、作品制作の中での創作ノートの役割を分析する。まず《わたしのお母さん》の創作ノートにおいて、土方巽の舞踏譜の痕跡を発見するとともに、その振付は拘束力を持たず、大野自身の記憶、および折口信夫の『死者の書』からの引用と混成し重層的に

醸成されたイメージと分ちがたく重なっていることが確認された。こうして練り上げられた振付は、即興性を排除こそしないものの、その作品性を担保するものであることを強調する。再演において創作ノートが書き重ねられながらも維持される準拠枠としての振付は《ラ・アルヘンチーナ頌》にも指摘される。本作の創作ノートにおいてそれは、動きのダイナミズムを描き出すデッサンの中に、そして不在の他者として強調されている舞姫ラ・アルヘンチーナの記憶や批評の言葉によって練り上げられたテキストの中に見られる。こうして書き込まれた豊穡なイメージは、大野の情動や意識へ作用し、身体を動かしたのである。F・プイヨードの振り付け作品の理論を引きながら、大野の作品は自ら設定した振付を身体表現性によって解体しつつ、再構築していくものであると結論づけられる。

第3部「大野一雄が目指した動きの美学」では、土方の死後制作された《睡蓮》の創作ノートを取り上げ、まずはその中に大野の舞踏の訓練の実践を見出す。ソマトイクスにおける言語作用を分析した A. ゴッドフロワの研究や、言語的に示される知覚および動きから発生する脳による行為のシミュレーションを論じた G. ボランスの研究に依拠しつつ、例えばモネの絵画より発想を得た「見えない」視覚の状態などについて書いたテキストの中から、情動や身振りを生み出す地へ働きかける大野の方法が明らかにされる。又、シミュレーションによって「経験」された動きが自身の中で受容され、新たな感覚やイメージへと接続され、再びテキストの中に書き込まれるという重層的なプロセスも注目される。創作ノートを通じて大野が目指した踊りは、周囲の境界が溶解し、出現しては消滅する像としての両性具有者の身振りである。この像は第一に、対立する概念を攪乱し無効にするというその操作において、また第二に輪郭がなくなり、ある形にとどまることがないという点において、アンフォルムの美学を見ることができると論じられる。

最後に、以上の美学に合わせて、自己解体と思われるまでに他者の言説やイメージが豊富に取り込まれた創作ノートの性格と意味を新たに問い、それらを大野の語り得ない戦争体験に結び付けて分析する。この体験を抱えた自己を自己として断定することを無意識に避け、積極的に他者を取り入れようとする姿勢は創作ノートのエクリチュールに通底している。また、その戦争体験が、大野の作品の中心に立つ、アルヘンチーナや母といった表象の中に加害／被害の両面を伴って湧出しているということも、以上の解釈の裏付けとして指摘される。以上を受けて、他者への伝達機能を持つ記号的ノテーションやスコアと根本的に異なる大野独自の創作ノートは、20世紀の社会や文化の歴史を刻んだ他者の言葉、他者の声を呼び込んだ大きな記憶の集積でもあり、大野はこれらの声によって踊りを作り出していたと結論づけられる。

本論文は、大野一雄の創作ノートの全貌を網羅的に解説したわけではないものの、この難解なコーパスに初めて本格的に取り組み、オリジナルな研究分野の開拓に対する貢献が大きいものとして意義深い力作である。審査会では、大野の舞踏の本質に新たな光を照射する画期的な研究であるとして高く評価され、分析の至難さにもかかわらず現場に深く関わりながら丹念に考察を重ねた労作であると認められた。ただし、大野の技法の形成にとって重要であった『O氏の肖像』などの映画作品に触れていないこと、映像で見る動きとノートを照合する研究方法が事実を浮上させるメリットがある反面、形の類似だけで影響などの証にする手続きが不十分であること、マスゲームなど数カ所において歴史的な文脈に対する配慮が足りないこと等が指摘された。とはいえ、以上指摘された瑕疵は本論文の学術的な意義を本質として損なうものではなく、宮川氏の今後の研究によって発展的に解決されるものであろうことも確認された。したがって、本審査委員会は全委員一致で、本論文提出者に博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。